

## 集団宿泊的行事における子どもたちの学びの一考察 —宿泊することによる非認知能力の成長に着目して—

大郷 朔矢 教職基盤形成コース 教育課題探求プログラム

キーワード：集団・宿泊的行事，非認知能力，修学旅行，マインドフルネス

### 1. 問題の所在と研究の目的

#### 1.1 問題の所在

近年，コロナウイルスの蔓延も次第に共存の時代となり，様々なイベントや慣習が新たに見直され時代に沿ったものへと変化してきている。これは学校行事においてもいえ，運動会では保護者の負担や教員の仕事量が減るという理由で一日開催から半日開催が主流となってきている。このような中，修学旅行などの集団宿泊的行事においても様々な変化がおこっている。従来の都心部や歴史的名所を訪れ観光を中心にするものから，体験活動に重きを置くものや他地域との交流に重きを置くものなど現在の集団宿泊的行事を一緒にたにすることは難しい。さらに，教員の多忙さからの規模の縮小や宿や交流する団体との関係による活動の定型化など，抱える問題も少なくない。このような状況の中，場所も活動も様々に異なる集団宿泊的行事において，共通する子どもたちの学びについて明らかにしたいと考えた。

また，本研究では子どもたちの学びについての指標として，小塩(2021)の非認知能力をあげる。集団宿泊的行事における学びというのは数値で測れるものではなく，ある意味人間性に近いものだと筆者は考えており子どもたちがこれから心地よく生きていく中で必要な思考のようなものを身につけられるような特別活動としていきたいという願いがある。

#### 1.2 研究の目的

本研究では，実地調査とアンケート調査をもとに非認知能力の側面から集団宿泊的行事においての子どもたちの学びの具体について明らかにしていく。

### 2. 研究の方法

本研究では実地調査とアンケート調査をもとに研究を行っていく。実地調査では国立信州大学附属長野小学校の六年生が実施する谷浜鍛錬会と木島平村立木島平小学校の五年生が実施する八丈島宿泊学習に参加しエピソード記述をもとに分析を行う。アンケート調査では，二つの学校に活動の事前と事後に非認知能力をもとにしたアンケートを行い，その差を T 検定とウィルコクソンの符号順位検定を実施し分析を行う。

#### 2.1 非認知能力についてのアンケート調査

非認知能力とは小塩(2021)によると，Noncognitive Abilities の和訳で，「何かの課題に対して懸命に取り組み，限られた時間の中でできるだけ多く，より複雑により正確に物事

を処理することができる心理的機能ではないもの、思考や感情や行動についてのパターンのようなもの」としている。本研究では小塩が非認知能力を 15 個に分類した中で現職教員も含めた大学院生にアンケート調査を行い集団宿泊的行事において学びがありそうな 4 つの項目（マインドフルネス、感情調整、自己制御、共感性）についてそれぞれ 2 問の計 8 問、それぞれ 4 段階のリッカート尺度でアンケートを作成し実施をした。質問内容は表 1 に示すとおりである。

表 1 アンケートの質問内容

マインドフルネス①	様々なことに自分からやってみよう、挑戦してみようと思いますか？
マインドフルネス②	少し嫌な、大変なことでもそれを我慢して行動しようと思いますか？
感情調整①	自分がイライラしていたり、落ち込んでいたりした時に、気持ちを切り替えて行動をすることができますか？
感情調整②	仲間がイライラしていたり、落ち込んでいたりした時に相手の気持ちを考えて手助けすることができますか？
自己制御①	自分が決めた目標の達成のために、別のことをやめたり我慢することができますか？
自己制御②	みんなで決めた目標のために仲間の意見を認め、一緒に行動ができますか？
共感性①	他人の気持ちを考えて行動することができますか？
共感性②	他人の喜びや悲しみをともに感じるすることができますか？

## 2.2 アンケート調査の検定方法

本研究ではアンケートの検定方法について T 検定とウィルコクソンの符号順位検定を用いた。検定方法についてはそのアンケート結果が正規性を持っている場合、T 検定を用いるが、今回の質問内容では正規性を持たない可能性が考えられたため、ノンパラメトリック検定であるウィルコクソンの符号順位検定も行いより確実に優位性を明らかにした。

## 3. 研究の実際

### 3.1 谷浜鍛錬会

谷浜鍛錬会とは、信州大学附属長野小学校 6 年生が新潟県上越市谷浜海岸を訪れ遠泳を行う中で心と体を鍛錬する行事である。2023 年度は、7 月 12 日～7 月 14 日の 2 泊 3 日で信州大学附属長野小学校の 6 年生、全 73 名（1 組 38 名、2 組 35 名）、さらに引率の教員 10 名、信州大学教職大学院の実務家教員 1 名、同大学院の院生 2 名（筆者も含む）、同大学の学部生 1 名の参加で谷浜鍛錬会は実施された。日程は表 2 にまとめる。

### 3.2 八丈島宿泊学習

八丈島宿泊学習とは、木島平村立木島平小学校 5 年生が、東京都の区内と八丈島を訪れ別の地域子どもたちと交流を目的とする行事である。2023 年度は、7 月 19 日～7 月 22 日の 3 泊 4 日で木島平村立木島平小学校の 5 年生、全 40 名（1 組 20 名、2 組 20 名）、さらに引率の教員 5 名、木島平村教育委員会の職員 2 名と筆者の参加で八丈島宿泊学習は実施された。また、参加する 5 年 1 組に対し事前授業として感情調整をテーマとした道徳の授業を行った。日程は表 2 にまとめる。

表 2 各集団宿泊的行事の大まかな日程

	谷浜鍛錬会	八丈島宿泊学習
初日	午前・・・移動 午後・・・水泳 夜・・・グループ会，学級会	午前・・・移動 午後・・・東京タワー，国立博物館見学 夜・・・船で八丈島へ移動
活動日	午前・・・水泳 午後・・・水泳 夜・・・キャンプファイヤー 学年会	午前・・・郷土料理体験，牧場見学 午後・・・地域小学生と交流，海遊び 夜・・・一日の振り返り
最終日	午前・・・水泳 午後・・・移動	午前・・・植物園散策 午後・・・移動

### 3.3 考察

本研究ではどちらの小学校にも 2023 年の 6 月下旬ごろ事前アンケートを行い，附属長野小学校には谷浜鍛錬会の実施 3 日後に，木島平小学校には実施期間中の 3 日目の夕食後に事後アンケートをとった。以下の表 3，4 はアンケートの結果をまとめ T 検定とウィルコクソンの符号順位検定を行った結果である。

表 3 T 検定の検定結果

	木島平小学校		附属長野小学校	
	平均(SD)	t値(df)	平均(SD)	t値(df)
Q1 マインドフルネス①	0.256(0.785)	t(38)=2.04***	0.387(0.875)	t(31)=2.481****
Q2 マインドフルネス②	0.077(1.01)	t(38)=0.476n.s.	0.129(0.896)	t(31)=0.862n.s.
Q3 感情調整①	0.59(1.093)	t(38)=3.368****	0.065(0.92)	t(31)=0.477n.s.
Q4 感情調整②	0.051(0.826)	t(38)=0.388n.s.	-0.065(0.948)	t(31)=0.585n.s.
Q5 自己制御①	0.282(0.972)	t(38)=1.813**	0.29(1.216)	t(31)=1.857**
Q6 自己制御②	0.154(1.014)	t(38)=0.948n.s.	0.129(1.203)	t(31)=1.18n.s.
Q7 共感性①	0.231(0.777)	t(38)=1.857**	0.097(1.401)	t(31)=0.782n.s.
Q8 共感性②	0.231(0.959)	t(38)=1.504*	0.129(1.54)	t(31)=1.089n.s.

\*p<0.1 \*\*p<0.05 \*\*\*p<0.025 \*\*\*\*p<0.01

表 4 ウィルコクソンの符号順位検定の検定結果

	木島平小学校		附属長野小学校	
	Z値	効果量r	Z値	効果量r
Q1 マインドフルネス①	-1.874*	0.3	-2.017**	0.362
Q2 マインドフルネス②	-0.502n.s.	0.08	-0.776n.s.	0.139
Q3 感情調整①	-2.905****	0.465	-0.414n.s.	0.074
Q4 感情調整②	-0.251n.s.	0.04	-0.51n.s.	0.092
Q5 自己制御①	-1.588n.s.	0.254	-1.59n.s.	0.286
Q6 自己制御②	-0.781n.s.	0.125	-1.02n.s.	0.183
Q7 共感性①	-1.65*	0.264	-0.706n.s.	0.127
Q8 共感性②	-1.284n.s.	0.206	-0.978n.s.	0.176

\*p<0.1 \*\*p<0.05 \*\*\*p<0.025 \*\*\*\*p<0.01

表 3，4 から集団・宿泊的行事の事前と事後について，マインドフルネス①では木島平小学校で  $0.256 \pm 0.785$  (T 検定  $p < 0.025$ ，ウィル  $p < 0.1$ )，附属長野小学校で  $0.387 \pm 0.875$  (t 検定  $p < 0.01$ ，ウィル  $p < 0.05$ ) となり，自己制御①についても，木島平小学校では  $0.282 \pm 0.972$  (T 検定  $p < 0.05$ )，附属長野小学校では  $0.29 \pm 1.216$  (T 検定  $p < 0.05$ ) となり，どちらも事後が優位に大きいという結果となった。

マインドフルネスについては，事前からの活動への気持ちの高まりと日常と違う環境にいる場で数日過ごすという長期的な没頭感が影響していると考えられる。どちらの小学校にお

いても低学年の頃から気持ちの醸成が行われており、しっかりと事前の活動を行うことで今ここでの経験を大切にしたいと思う気持ちが生まれてきているのではないだろうか。また、宿泊を伴うことで日常と断絶し家族や習い事のことを忘れ活動だけに長い時間緩やかな没頭をすることができる。このこともマインドフルネスにつながっているだろう。

自己制御については、学校行事ならではの、様々な考えをもつ人とともに行動をすることが、宿泊活動を伴うことでさらに強く影響を及ぼしていると考えられる。親元を長期で離れ活動を行う中で自分も他者もストレスがかかっている状況になり日常とは違う仲間とのかかわり方になってしまうが、その中でマインドフルネスの気持ちを持っていることによって自己制御しなくてはいけない気持ちが働いたと考えられる。

また、それぞれの環境や活動の特徴から違う結果が出ている部分もある。木島平小学校は活動日数が一日長いことや、観光や体験などのポジティブな体験が多かったことから感情調整① $0.59 \pm 1.093$  (T検定  $p < 0.01$ , ウィル  $p < 0.01$ ) や共感性① $0.231 \pm 0.777$  (T検定  $p < 0.05$ , ウィル  $p < 0.1$ ), 共感性② $0.231 \pm 0.959$  (T検定  $p < 0.1$ ) について事後が優位に大きいという結果がでた。一方、附属長野小学校はマインドフルネス①の平均値で  $0.387 \pm 0.875$  (T検定  $p < 0.01$ , ウィル  $p < 0.05$ ) が木島平小の  $0.256 \pm 0.785$  (T検定  $p < 0.025$ , ウィル  $p < 0.1$ ), よりも高い。これは鍛錬という負荷のかかる活動であったことと事前活動の充実が理由としてあげられると考える。

#### 4. 成果と課題

本研究を通して、集団宿泊的行事には他の特別活動とは異なる2つの要素があり、これらによって非認知能力が育成されていることが分かった。1つ目は今この瞬間を大切にしたいというマインドフルネスの気持ちである。子どもたちは事前活動、さらに言えばその学年になる前から気持ちの醸成が行われてきており、自分にとってよい活動にするために様々な活動に真摯に取り組んでいる。この活動への特別感が子どもたちの学びにつながっていると考える。2つ目は日常から離れるという体験である。宿泊を伴うことで、親元を離れて長時間過ごすこととなり、子どもたちに自己判断の意識を与え、活動により没頭できる空間を生み出していると考えられる。

一方で課題としては、多くの学校で採用されている1泊2日の集団宿泊的行事が今回の複数宿泊がある場合と子どもたちに与える影響がどのように違うのか、学校ごとの特色が出る活動の中でマインドフルネスと自己制御が本当に集団宿泊的行事に共通する学びなのかあげられる。今後も教員として様々な集団宿泊的行事に関わる中で、子どもたちにどのような学びがあるのかを意識して取り組んでいきたい。

#### 主な参考文献

- 小塩真司(2021)「非認知能力：概念・測定と教育の可能性」北大路書房  
浜田知久馬(2015)「ノンパラメトリック検定の考え方」  
折笠秀樹(2015)「論文作成における統計解析に関する留意点」  
竹内秀一(2019)「修学旅行の歴史—修学旅行はなぜ生まれ、どう進化を遂げてきたのか—」